



ヒヤリハット報告の習慣化による 保育現場の安全な環境確保への取り組み

TQM委員会 子ども未来事業部
大槻 香奈恵

『ヒヤリハット』とは？

重大な事故や災害には至らなかったものの、一步間違えれば大きな事故につながっていたかもしれないような「ヒヤリ」としたり、「ハッ」としたりした危険を感じた出来事のこと

＊ハインリッヒの法則＊

1件の重大な事故の背景には…

→29件の軽度事故

→300件のヒヤリハットがある

背景

施設差・個人差があり全体的に報告件数が少ない
⇒施設により記入基準のばらつき
記入に対する負担感

目的

様々なヒヤリハットを意識し、報告件数の増加に取り組む
⇒子どもたちの安全な保育環境の見直し、保育の質の向上につながる

方法①書式の見直し

BEFORE

ヒヤリハット報告書		園長	主任	記入者	閲覧者
保育園					
発生日時	R	年	月	日 ()	記入日
発生場所					
園児名			クラス名		組 歳児
内容					
対応					



AFTER

ヒヤリハット報告書		記入者
施設名：		
発生日時	R	年 月 日 ()
内容(対応した際は、対応内容も記入)		

記入欄・押印欄を最小限に

方法②記入基準の提示

ヒヤリハットの過去の事例の提示



主な項目	過去事例より抜粋(一例)
転倒・転落(自損・他損・対物)	棚に登ろうとして、落ちそうになった・棚が倒れそうになった おもちゃなどを持ったまま走り、転倒しそうになる
衝突・外傷・接触(対人・対物)	走りまわり、他児に衝突しそうになった 風により開いた門に衝突しそうになる 見覚えのない外傷がある
誤飲・誤食・異食・異物混入	おもちゃや異物を口に入れていた アレルギー児への誤配膳(未然防止) 食べ物に異物(ゴム手袋片や袋片など)が入っていた(口に入れる前に発見) 子どもの持ち物や衣服に付け爪やつけまつ毛が付着していた(異食のおそれ)
対人トラブル(噛みつき・暴力・暴言など)	他児に噛みつこうとする 他児を叩こうとする 他児へ過度にきつい言葉を使う
危険行為	ハサミを振り回す 禁止遊具を使用する 道具や遊具を危険な使い方をする おもちゃなどを投げる 水筒の紐を短くして首にかけていた(窒息のおそれ)
行方不明・人数確認不足	学校から帰ってこない トイレに行ったまま戻ってこない 人数が足りないまま、戸外へ出発しそうになる 登園・来館予定の子どもが来ず、保護者にもしばらく連絡がつかない
セキュリティ(鍵の未施錠や故障)	保護者が鍵を閉めておらず、施設から飛び出そうとした 鍵を自力で解錠しようとする
不審者・外部侵入	下校時の子どもへ声をかける 施設内へ無断で入ってきた(トイレを借りたいなど)
落下物、施設・設備・備品の不備や破損など	公園内に花火が落ちていた おもちゃや備品の一部が破損していた プラスチック片が床に落ちていた
職員による不注意	文房具を取る際に、落としそうになる 扉を開ける際に子どもが扉近くにいた
※上記内容に関わらず、気になったこと・些細なことでも報告ください	

方法③ 報告方法の見直し

報告書記入後に新設した共有フォルダへ保存
各職員が好きなタイミングで確認できる



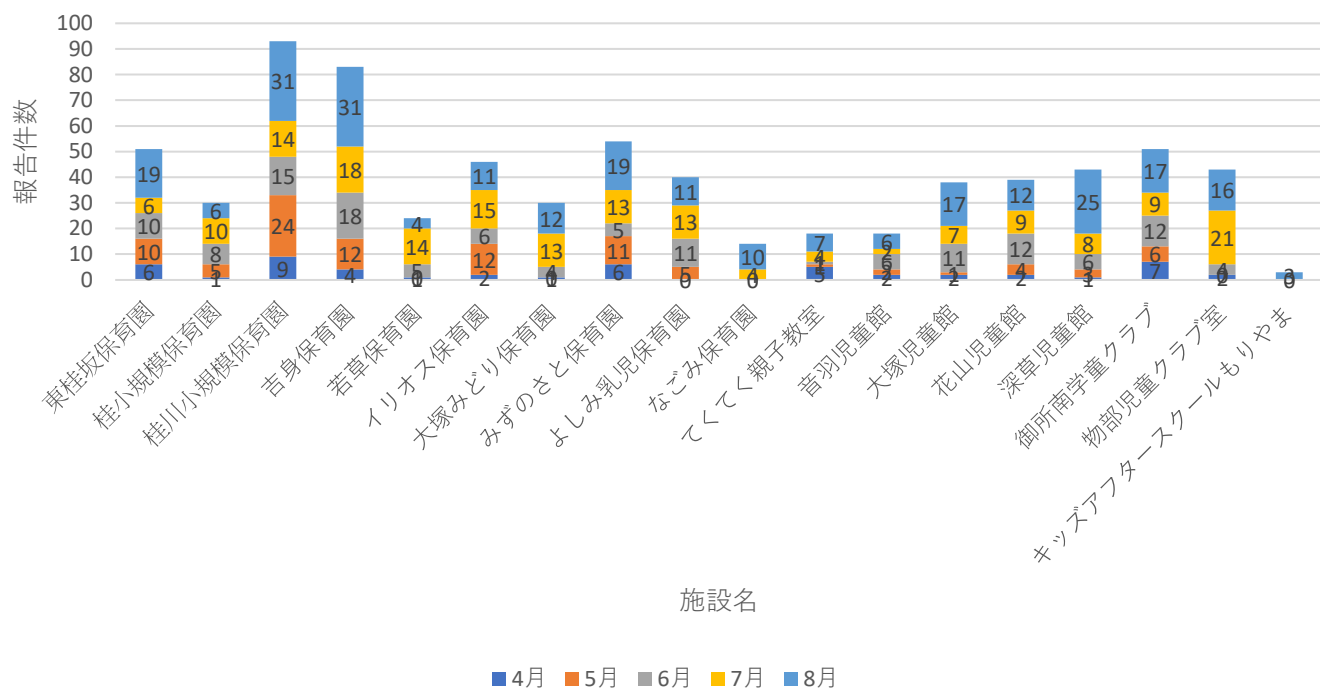
方法④共有方法の見直し

毎月の報告内容を集計
全職員へ報告件数や内訳などの周知

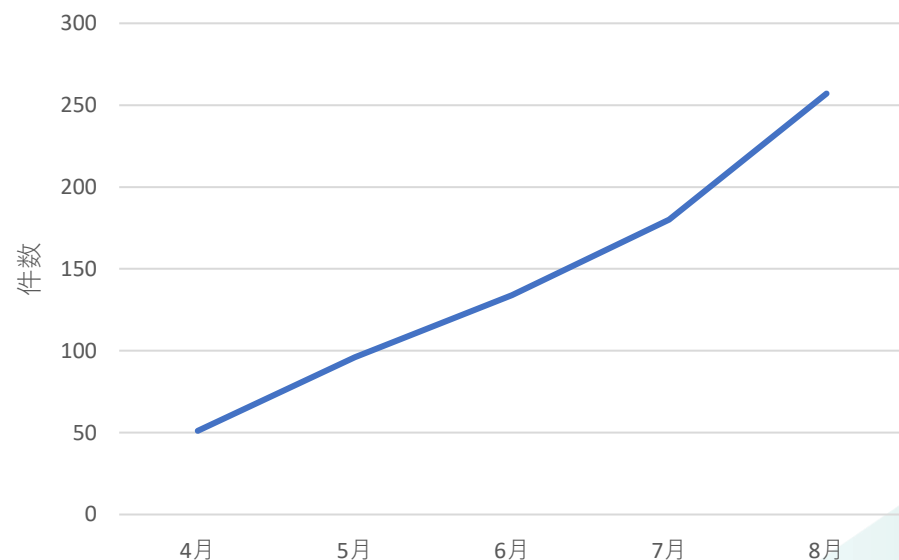
結果

- ・ 報告件数が増加
- ・ 今まで記入していなかった職員の報告も見られる
- ・ 他施設の事例の共有により、事例検討・対策につながっている

施設別報告件数



子ども未来事業部全体報告件数



考察・評価

全職員が標準化し、統一したツールを用いることで、継続した意識づけとなり実施できたことが成果につながったと考える。

- ①子どもの危険につながる些細なことに気づく
- ↓
- ②報告書を書く習慣をつける
- ↓
- ③自施設の事例傾向分析・対応をする
- ↓
- ④子どもの安全を守る



職員1人1人がヒヤリハットを意識しながら、報告・情報共有することで、保育環境の見直し・保育の質の向上につなげ、子どもたちが安心・安全に過ごせる施設づくりを行っていきたい。

展望

職員1人1人がヒヤリハットを意識しながら、
報告・情報共有することで、
保育環境の見直し・保育の質の向上につなげ、
子どもたちが安心・安全に過ごせる施設づくりを行っていききたい。

